

鳥居龍藏と信濃調査（中）

—— 日本民族起源論との関連を中心に ——

田畑 久 夫

- 一 問題の所在
- 二 鳥居の「固有日本人」説（以上本誌第四号）
- 三 信濃調査の意義とその成果
 - （一） 信濃調査に至るまで
 - （二） 日程と調査内容
 - （三） 信濃調査の成果（以上本号）
- 四 日本民族起源論のその後の展開

—— 結びに代えて ——

三 信濃調査の意義とその成果

前回（本誌第四号、二〇〇〇年、一〇二頁）において論じたように、本稿の最終目標は、鳥居龍藏のライフワークの一つと看做されている、日本民族Ⅱ文化起源論の解明

を行なうことであつた。この目標に従って、前回では恩師坪井正五郎の立場に反することになるが、日本旧石器時代人Ⅱアイヌ説に近い、「固有日本人」説を提唱する経緯を中心に、論を展開した。本稿は、かかる前稿を受けて、鳥居龍藏が強く主張する「固有日本人」の足跡を含む、有史以前の日本の解明に重点を置いた調査と看做される代表的な信濃調査の分析・検討から論じることにする。

（一） 信濃調査に至るまで

鳥居龍藏が本格的に信濃調査に出かけたのは大正七年（一九一八）であつた（第一表）。当時、鳥居龍藏は四〇代であり、調査・研究にもっとも集中することができた時期だった。すなわち、第一表にみられるように、朝鮮半島、東シベリア、北樺太（サハリン）、中国の山東省など日本

第1表 大正年間の主要調査歴

年 度	年 齢	調 査 地	備 考
大正元年(1912)	42(歳)	朝鮮半島	大阪毎日新聞社長本山房・同行
大正2年(1913)	43	宮崎県延岡地方、朝鮮半島	
大正3年(1914)	44	朝鮮半島	
大正4年(1915)	45	朝鮮半島	
大正5年(1916)	46	朝鮮半島	
大正6年(1917)	47	畿内	
大正7年(1918)	48	長野県諏訪地方	文学博士となる
大正8年(1919)	49	東部シベリア	
大正9年(1920)	50	長野県諏訪地方、福島県会津地方、新潟県佐渡が島	
大正10年(1921)	51	北樺太調査、長野県下伊那地方・木曾地方	
大正11年(1922)	52	徳島県徳島市	
大正12年(1923)	53		東京帝国大学助教授となる
大正13年(1924)	54		國學院大学講師になる
大正14年(1925)	55	宮崎県延岡地方	國學院大学教授となる
大正15年(1926)	56	宮崎県延岡地方、中国山東省	東京帝国大学辞職

【出所】 鳥居龍藏(1977『鳥居龍藏全集 別巻著述目録・年譜』朝日新聞社、177～222ページ)などを参考にして作成

第2表 主要なフィールドサーヴェイの分類

	国内調査地	国外調査地
本人の希望	畿内、会津、佐渡が島、沖縄、武蔵野	遼東半島、満州、蒙古(モンゴル)、朝鮮半島、シベリア、北樺太
外部からの依頼	延岡、諏訪、下伊那	台湾、北千島列島、山東省、ブラジル

註) 1: 一部は外部からの依頼による

【出所】 鳥居龍藏(1953)『ある老学徒の手記 考古学とともに六十年』朝日新聞社、
鳥居龍藏(1976・E)『鳥居龍藏全集 第12巻』朝日新聞社、137～341ページ
所収などより作成

列島周辺の各地域を精力的に調査を行なうとともに、国内においても北は福島・新潟の両県から南は宮崎県までほとんど休むことなく出かけ、フィールドサーヴェイに従事した。

大正時代の鳥居龍藏の信濃を筆頭とする国内調査の特色は、単独で行なうのではなく、例えば大正九年（一九二〇）八月に実施した福島県および新潟県の調査に代表されるように、かかる調査が福島県の猪苗代湖畔で開催される夏期大学での講演前後に行なったという関連もあって、県の担当者（学務課長）や県史跡調査嘱託をはじめとする地元の行政官や研究者の強力な協力を得て行なわれたものであった。この点に関しては、明治三十二年（一八九九）に実施された北千島列島調査が恩師坪井正五郎から、また大正二年（一九一三）三月から開始する宮崎県の延岡を中心とする調査が宮崎県知事からそれぞれ個人的に依頼されたものであったのと類似している。一方沖縄調査にみられるように、鳥居龍藏の強い希望によって実施されたフィールドサーヴェイも存在する。かかる点は、鳥居龍藏が行なった数多くの日本列島周辺におけるフィールドサーヴェイにも該当する。つまり、鳥居龍藏のフィールドサーヴェイは、国内国外

とも外部からの依頼によるものと、本人が望んで実施したものとに大きく二分することができる（第二表）。それ故、フィールドサーヴェイの方法に関しても異なっていた。一般にフィールドサーヴェイの方法は、対象とする地域のスケールや調査内容の濃淡などによって、エクステンシヴ調査とインテンシヴ調査とに区分することができる。鳥居龍藏は、国内・国外と問わず、フィールドサーヴェイを行なった地域が研究者としては最初に訪問した場所であったり、科学的な方法で調査をした最初の地域が多いという関係から、対象地域を広範囲とするエクステンシヴ調査を調査方法として採用することが多かった。信濃調査もかかる典型的なエクステンシヴ調査であった。

しかも鳥居龍藏は、前述したように、信濃調査に関して多くの地元の行政官や研究者の絶大な協力を得ていた。すなわち、訪問先においては、鳥居龍藏が興味・関心を示すであろう、周辺地域で採集された多数の石器や土器をはじめとする出土品が、学校の教室あるいは講堂兼体育館などを借りて、所狭しと展示してあった。さらに、石器や土器などの遺物が出土する現場には、地元の学校の教師や郷土史家が案内し、説明を行なうという便宜もみられた。かよ

うに、非常に多数の地元の関係者の協力が得られたのは、大正七年（一九一八）に諏訪教育部会より、諏訪郡史の先史時代と原史時代の執筆依頼⁽¹⁰⁾、さらに翌年には隣接する上伊那郡史の先史および原史時代の執筆依頼を引き受けたことによるもの、と推定できる。

以上のように信濃調査は、地元の人びとの協力・支援のもとに調査が進められたのであったが、他にもう一つ鳥居龍藏の他地域のフィールドサーヴェイではあまりみられない特色があった。その特色とは、現地における遺跡の発掘を主体にした調査は勿論のこと、その成果をまとめた著作の一部をも、鳥居龍藏以外の研究者が担当したことである⁽¹²⁾。かような協力者を得たことや、右述したように地元の人びとの多大なる協力があつたので、鳥居龍藏が、

本書は、一地方の教育会の出版に属するものであるが、これは『府史』・『懸史』以上で、実に『大學紀要』・『大學報告書』と匹敵するものである。これらは先の『諏訪史』といい、『下伊那郡の先史及原史時代』といい、共に頗る誇るべきものである。一地方の教育会が已に既によくかくの如き純粹學術の地方的論文を出版させられたるは、我が国の學術が今や官学たる大学のみならず、

これが離れて民間にも移って行く過渡期である気がする⁽¹³⁾。と自負しているように、内部が非常に充実した著作として結実した。かかる事實は、引用した鳥居龍藏の自負だけではなく、当時の郷土史誌類としては大変めずらしいことなのであるが、両著とも発行部数は多くないが、學術専門出版社から発売されていることからもうかがい知ることができる⁽¹⁴⁾。

このように、非常に成功裡に終了した諏訪および上伊那地方を中心とした信濃調査であつたが、鳥居龍藏は他の調査の事例――国外での場合がほとんどであるが――同様、専門書以外に一般の読者を対象とした啓蒙的な書物を出版した⁽¹⁵⁾。理由は、欧米の研究者間ではこのようなことが慣例となつていると聞き、「然るに日本の学者の発表するのは、惜しいかな少数のもののみに見せる的のむつかしい頗る面白くない、石をかむような堅い報告書だけあつて、……（以下省略）⁽¹⁶⁾」という状況を克服しようとする信念に基づいたものであつた。すなわち、鳥居龍藏は、啓蒙的な書物を執筆することによって、かかる学問的な底辺を拡大することを目ざしたためであるといえる。

(一) 日程と調査内容

前項で論じたような契機と方法によって鳥居龍藏は信濃調査に従事したのであった。その信濃調査はどのような日程で実施されたのであろうか。具体的に検討していくことにする。

鳥居龍藏は、信濃地方には明治四十二年（一九〇九）に出かけ調査を実施している。しかし右述したように、郷土史関係の執筆依頼を受け、本格的なフィールドサーヴェイを開始したのは大正一〇年（一九二一）であつた。また大正一四年（一九二五）には、『先史及原史時代の上伊那』の執筆のための総括調査を行なうために信濃地方に出かけた。これら一連の鳥居龍藏の信濃調査に関しては、多くの国外調査にみられたように、専門的な學術書が出版されると同時に、調査全体を平易に述べた啓蒙的な書物は出版されなかつた。しかしその調査の一部であり、もつとも鳥居龍藏が精力を注いだ調査と看做される大正九年（一九二〇）および大正一〇年（一九二一）の調査に関しては、調査記録に基づく一般読者を想定した啓蒙的な書物が刊行されている。以下では、この書物の記載を中心に論を進めていくこ

とにする。というのは、周知のように鳥居龍藏には自身の半生記を描いた自叙伝が存在するからである。本来であれば、この自叙伝も大変有力な史料となるのであるが、残念ながら同著は自叙伝とはいっても、調査に関しては海外での調査が主体となっている。そのため、信濃調査についてはほとんど役に立たない。

信濃地方に関しては、既に述べたように、大正七年（一九一八）に郷土史執筆の依頼を受けたのを契機として、同年一月に依頼された諏訪教育部に挨拶に出かけた。そして翌八年一月に、今後調査を実施することになる現地の学校の先生方に協力してもらう目的で、三日間にわたって、同地方の先史・原史両時代に関する講演および石器や土器の採集方法など調査上の注意を行なった。調査を行なう前にかような講演などを行なった理由は、フィールドサーヴェイを自ら実施することは勿論であるが、非常に広範囲の地域なので、一人で調査地全域をカバーすることが困難であると考えたからである。

かくして信濃調査は、執筆も含めて多くの人びとの協力を得て進展していった。かかる点は、単独でフィールドサーヴェイに従事することが多かった鳥居龍藏にとっては、今

回の信濃地方の調査および執筆の方式は、異なった方式であったといえる。すなわち、このような方式を採用したのは、信濃調査が純粹の学問的な調査ではなく、出版年度があらかじめ決定している郷土史の執筆によるものであったからである、と推定できる。

諏訪地方調査

以上のようないわば調査の準備段階を終了して、鳥居龍藏が本格的に諏訪地方を中心とする信濃調査を実施するのは、大正九年（一九二〇）からであった。²⁰

諏訪地方に対しては、本格的な調査を実施する以前に数度簡単なフィールドサーヴェイを実施した経験などから、鳥居龍藏は次のような印象をもっていた。すなわち、

諏訪の地は天竜川の水源地で、三・遠に關係し、又甲州・武蔵にも交通路があり、他の方面では飛驒、更に美濃や越中・越後にも線をひく事が出来る。この事實は有史以前から多少見えまして、その遺物の如きこれらの地方と混雜して居ります。すなわち当時の民衆が河筋に沿うて此所に入つて来て、これら各地方の民衆が諏訪湖畔で偶然落ち合つたという有様です。こんな状態から考へますと、当地方の遺跡は日本海や太平洋沿岸の低地日

本の有史以前民族を、ヶ所に集めて居るような気がします。そしてかくの如き事實は日本の他地方では容易に見られない。²¹

と述べ、この地域における有史以前の移住・植民の跡を探ることを調査の最大の目的としたのである。²²

鳥居龍藏は四月二・三日信濃に到着すると、岡谷から下諏訪周辺にかけて、二日間有史および原史時代の遺跡・遺物の調査を開始した（第三表）。この地方にはとくに有史以前の遺跡が多く存在する。そのいずれもが規模が大きく、保塞を背後にしたものや、丘陵の上部に位置するという立地の特色がみられた。さらに、この地方は黒曜石が出土する和田峠（一、五二〇メートル）に近い関係からか、同石を原料とする石鏃などの製造工場跡もみられ、石鏃の破片などは簡単に表面採集できた。また、多くはないが原史時代の古墳もみられた。これらの古墳は、その内部に石槨を有していることを特色とするが、下諏訪神社近くの青塚と称されている古墳では、円筒埴輪の破片が採集できた。このことから、青塚は埴輪が立てられた時代の古墳であると時代が特定できた。

以上の諏訪湖右岸の有史および原史時代の遺跡・遺物調

第3表 信濃調査（大正9年）日程表

日時	調査地	調査内容	特記事項
4/21-23	岡谷～下諏訪	有史以前・原史時代の遺跡・遺物	顔面把手見学 積石塚(ケールン)発見
24	上諏訪～上諏訪	有史以前・原史時代の遺跡・遺物	
25	下諏訪～御射山	黒曜石の採集	
26	諏訪近郊	遺跡調査	
27	茅野	原史時代の遺跡・遺物	
28	山浦地方	諏訪大社（上社）	
29	山浦地方	有史以前の遺跡	
30	南大塩地方	有史以前の遺跡	
5 1	上諏訪	採集資料整理	
2	塩尻～松本	阿礼神社	デイダラボッチ伝説 ドルメン式古墳の発見
3	松本～大町	松本陳列館	
4	大町～池田町	遺跡調査	
5	木崎湖畔	遺跡調査	
6	木崎湖畔	遺跡調査	
7	有明近郊	有明神社	
8	青木湖畔	有史以前の遺跡	
9	大町	中綱湖畔の遺跡調査	
10	伊那	下伊那郡教育会	
11	東京		

【出所】 鳥居龍藏（1925）『有史以前の跡を尋ねて』雄山閣、鳥居龍藏（1976・A）『鳥居龍藏全集 第3巻』朝日新聞社、429～528ページ所収、とくに463～481ページより作成

査が終了すると、湖上に舟を出して湖底に存在する遺物を引き上げる予定であった。しかし強風のため湖上からの調査は延期することにした。このため、四月二十九日は予定を変更して、上諏訪から下諏訪にかけての湖畔地域を調査した。この地域の有史以前の遺跡は厚手派、あるいは厚手派と薄手派の混交、さらには厚手派と「固有日本人」が作成した弥生式土器の混交など、遺跡地によっては出土する土器類の製作者がそれぞれ異なっていた。とくに下諏訪停車場・帯の地は、「固有日本人」の遺跡で、弥生式土器と石器が併存して出土する。このことから鳥居龍藏は、次のような興味ある事実を導き出した。すなわち、古代においてはアイヌの石器時代と我々祖先つまり「固有日本人」の石器時代がこの地に存在したことが明白となった。それ故、「固有日本人」も石器を使用していた時代（縄文時代）に居住していたことが判明した。かかる点は、「固有日本人」が弥生時代のみならず、縄文時代にも信濃地方に存在したということが証明されたと考えたのであった。

わずか数日間であったが、諏訪地方のフィールドサーヴェイを実施してみると、この地方は、黒曜石を原料とする石鏃の出土が実に豊富ことが分かった。石鏃の原料である

黒曜石は、前述したように八ヶ岳の山系（最高峰赤岳二、八九九メートル）の和田峠（一、五三三メートル）付近から大量に採集できた。それでは、当時の人びとはどのようにしてかかる黒曜石を採集したのであるか。この点に興味をもった鳥居龍藏は、翌二五日から黒曜石の出土する山に登山することにした。

当日早朝、下諏訪から溪谷に沿って霧が峰（一、九二五メートル）に向かって登りだした。そして海拔高度二、〇九二メートル付近ではじめて石鏃製造地跡を発見した。この場所は、現在でも鬱蒼たる針葉樹の森林帯で、周辺の村民からは天狗の住んでいる神秘の森といわれた場所であった。その後、ホシガトウという地点を通過した。ここには、黒曜石の自然に欠けた破片が散乱していた。地名のホシクソは現地語で黒曜石、トウは峠を意味することからも推察できるように、当該所が黒曜石の産地であったようである。鳥居龍藏は、表面採集できた黒曜石の破片について、次のような推論を行なった。つまり、これらの黒曜石の破片は、もとは母岩の中に包含されていたが、その後母岩の他の部分が柔らかいために消失し、黒曜石が比較的硬度の軟製破片状態となって残存した。これが露出し、更に小さく砕け

て破片になったと看做したのであった。

さらに登り続け、海拔一、四五〇メートルの旧御射山の山頂に到着した。頂上は凹地となっていた。その中央には八島・小島・鎌ヶ池と呼ばれている三池が連続しており、周囲は外輪山状の丘陵が発達しているというカルデラ状の地形であった。山頂は、麓に位置する下諏訪神社の奥の院にあたり、鎌倉時代には盛んに神事が挙行された場所であった。池の周辺では有史以前の遺物である石鏃や錐を発見した。このことから鳥居龍藏は、一年のある特定の時期（夏季など）に、当時の人びとがここに居住したのではないかと推定した。居住が年間のある時期に特定したのは、海拔高度が高いため、寒い冬季は居住が困難であろうと考えたからであった。調査が終了すると、同じ道を下山した。

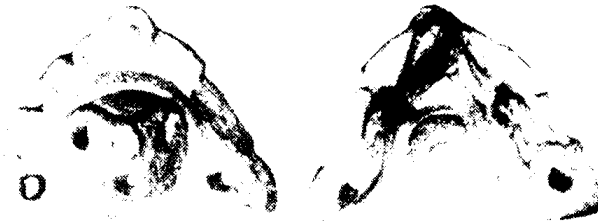
翌二六日は、諏訪湖周辺の有史以前の遺跡・遺物調査に従事した。当地方の遺跡から出土する土器はほとんどが厚手派の土器であった。厚手派土器は、研究者が多数存在する関東平野では出土が極端に少ない。それ故、かかる土器に関する研究は非常に遅れている。鳥居龍藏はそのような学問的状况を考えて、とくに熱心にこの形式の土器を採集することに努力を払った。そして、採集した厚手派土器の

上縁に付いている顔面把手（第一図）に関心をもった。この顔面把手は、当地方から出土する厚手派土器の特色だったからである。

第一図 種々の顔面把手



平野村小尾口海戸発見（岡谷山校蔵）



宮川村茅野四ツ塚（田實文朗氏蔵）



下伊那郡市田村吉田本城（同村小学校蔵）

【出所】鳥居龍藏（一九二四）『諏訪史第一巻』信濃教育会諏訪部会発行、鳥居龍藏（一九七六・△）『鳥居龍藏全集第三巻』朝日新聞社、四二八ページ所収、とくに三八二、三八三ページより引用

また数日來の当方の原始時代の調査では、古墳に馬具が埋藏されているケースが多いことに注目した。つまりこのことで鳥居龍藏は、当時既に盛んに馬が飼育され、乗馬として用いられていたと看做したのである。この馬の導入を含めて、今後はシベリアに居住するウラルアルタイ系の民族との比較が必要となろうと考えた。かような観点をもつに至ったのは、鳥居龍藏が信濃調査を本格的に実施した同時期に、東部シベリアの調査にも従事していた。それ故、シベリアを含む北方地方にも豊富な知識を有していたためである、と推察できる。

二七日は茅野周辺調査を行ない、翌二八日は茅野から諏訪上社に向った。諏訪上神に参拝した後、周辺一帯の有史・原史時代の遺跡・遺物調査に従事した。以上これら一連の調査の中で、鳥居龍藏は、次のような中間的な結論を得た。すなわち、

諏訪湖畔一帯の有史以前遺跡は、その土器の形式から申すと厚手派の方であるが、豊田村字大安寺の遺跡はこれに反して専ら薄手派で、その中に武蔵・下総・常陸等の薄手派と一見区別なし難いものがあります。されば此処の遺物はほとんど総ての厚手派遺跡の中に特別に存在す

る有様です。しかしその中に少しばかりの厚手派土器もあります。それは明らかに混合という事がわかるのみならず、それより少し離れた所に別に厚手派の遺跡があります。これは面白く、互いの交通往来の事実を示すものでしょう。⁽²⁵⁾

と論じ、有史以前において、厚手派土器を用いる集団と薄手派土器を使用する集団との間には互いに交流が認められるという結論を導いたのであった。さらに当地方には、下諏訪停車場遺跡などに代表される如く、数は少ないが「固有日本人」が用いたとみられる弥生式土器もみられた。しかも、その時代は有史以前まで逆のほることが可能であると考えた。

以上のように、諏訪湖周辺の遺跡・遺物調査が終了したので、二九日には諏訪湖の東南に位置する山浦⁽²⁶⁾と呼ばれている地域での調査に向った。⁽²⁷⁾山浦地方の中央には大泉および小泉とそれぞれ称されている小丘があった。その二つの小丘を境にして、同地方は南山浦と北山浦とに二分される。⁽²⁸⁾鳥居龍藏は、その内の北山浦地方の遺跡の調査を翌三〇日の二日間にかけて実施した。その結果当地方の遺跡は、一部薄手派土器も出土するが、多くは厚手派土器であった。

また土偶もみられた。さらに平併して出土する石器としては石斧、石鏃、石錐、石棒など各種のものが出土したが、中心の石斧には打製石器と磨製石器の両方が存在することが確かめられた。その他有史以前のもものと推定できる曲玉や玖などもみつかった。かように調査期間は短かったが、山浦地方の遺跡・遺物調査は多くの成果をあげ、終了した。夕方には上諏訪の宿に帰った。

翌五月一日は、これまで採集した石器・土器の整理を行った。採集した土器などの遺物の中では、諏訪郡玉川村から出土した遮光器紋様が付いた土器がとくに目についた。この土器は残念ながら半分破損しているが革製の遮光器の紋様が付いていた。遮光器は、雪中で目を保護するためにかける眼鏡のことであるが、獣革製のものはエニセイ川の河畔に居住するサモエド族などが使用していること有名なものである。日本においても、出羽や奥羽両国出土の土偶などに遮光器を目にかけているものもみられる。かかる点も、前述した馬と同様、当地の有史以前の住民が北方民族との関係が深いことを示す好例であると看做した。二日には塩尻に向った。塩尻では塩尻峠⁽²⁹⁾(九九九メートル)付近にある有史以前の遺跡調査に出かけた。ここでは厚手

派土器、石鏃などが採集できたが、それら遺物の形状から諏訪地方の遺物との関係が深いことが判明した。

以上で諏訪地方の本年度の調査が無事終了したので、次の調査地である木崎湖に向かうことにした。同日夕方塩尻から松本に行き、松本で宿泊した。翌三日には、市内にある松本陳列館を見学したり、城山公園の丘陵に登り、有史以前および原史時代の遺物を採集した。また城山からみえる中山とモロ山の両山については、調査を行ってきた諏訪地方同様、デイグラボッチの巨人伝説が残っていることにも強い関心を示した。その後本日の宿泊地である大町に向った。

四日は地方の学校の先生方の案内で、大町から隣接する池田町付近の遺跡調査に従事した。その後、翌五日から木崎湖畔の調査を開始した。木崎湖畔ではアイヌが有史以前から居住していたので、その遺跡が各所に確認できた。

伊那地方の調査

前述したように、鳥居龍藏は諏訪地方の調査とほぼ平行して上伊那地方の有史以前および原史時代の遺跡・遺物に関する調査を行なった。このように、ほぼ同時期に平行して調査を実施したのは、上伊那地方が諏訪地方に隣接して

いるという地理的位置を占めているので、連続して調査を行なうことが可能なからであった。すなわち、今回の調査対象地域である上伊那地方は、天竜川の上流に位置しているが、天竜川は諏訪湖を水源とし、南流して遠州灘に注ぐからである。

鳥居龍藏は、上伊那地方の調査に関しては既に述べたように、数回信濃調査を連続して行なったが、その全調査について調査記録を整理した論攷あるいは著作を発表ないし出版していない。³⁰しかし期間は短いのであるが、鳥居龍藏にとつては本格的な調査と看做される大正一〇年（一九二一）五月三日から八日までの調査に関しては詳細な概要が発表されている。それ故、本稿ではかかる調査を中心に、上伊那地方の調査の概要を検討していくことにする。

前日の夜飯田に宿泊した鳥居龍藏は、翌五月三日早朝から市内北部の座光寺整列地³¹の調査に出かけた。一行は地元の学校の教員および郷土史家からなる数人だった。最初に郷土史家が採集した石器および土器などの遺物を見学した。このことによつて当地方における遺物の種類などを類推することが可能となった。座光寺原整列地では石鏃や石斧などの石器および土器をはじめとする多くの遺物を採集する

ことができた。採集した石鏃は、和田峠から出土する黒曜石を原料としたものである。また石斧は、天竜川の河岸で採集した石を打製してつくったものと推定できた。鳥居龍藏は、これらの遺物を採集しつつ、当時この地は鬱蒼たる大森林であり、そこに居住していた太古の民族の素朴な生活などに思いを馳せたりした。

その後近くの学校で休憩させてもらった。鳥居龍藏は、休憩させてもらった学校の運動場の一角にある遺跡整列地（鐘鋳原整列地）を調査したところ、崖で遺物包含層を発見した。そこでこの包含層（鐘鋳原包含層）の発掘にとりかかった。その結果八四にもぼる土器を得た。これらの土器の中には、厚手派・薄手派の混交したものや、あるいはアイヌが使用した土器と弥生式土器とが混交したものが多数みつけた。鳥居龍藏は、かように採集した土器に混交したものがみられるのは、「アイヌ時代に既に固有日本人が来て住居していた事を物語っている面白い例³²⁾」であると看做した。そして、このような有史以前の文化を担った人びとはどこからやって来たのか、今後の研究課題としたいと考えた。

その後唐沢原に向った。ここでは石包丁が出土していた

が、実際に現場に出かけてみると、石包丁が出土したとされる場所で、幾種類もの弥生式土器を発見することができた。それ故、この遺跡において石包丁が弥生式土器と共存することが明白となった。この点は特記すべき大発見であった。というのは当時石包丁は、アイヌつまり有史以前の人びとが使用したものか、弥生式土器を用いる人びと（鳥居龍藏のいう「固有日本人」）が使ったのが、考古学上の問題となっていたのであった。この遺跡での調査からかかる問題に対しての解答が出たと鳥居龍藏は考えたのであった。次に市田学校にある遺物陳列場の見学を行なった。宿泊は当地市田にとった。

翌三日は近くの古墳の見学に出かけた。付近にみられる古墳は多いが、それらはすべて天竜川によって形成された河岸段丘の段丘上に、一列に塚が並んでいるという特色があった。当地の古墳の形成としては、瓢箪型をした前方後円墳と円形をした円墳の二種類がみられる。鳥居龍藏はそのうち円墳を調査した。円墳の内部には玄室と羨道がみられ、前者に死者が葬られていた。後者はその入り口となっており、南西方向に開いていた。また玄室の天井には平らな巨石が数個置かれていた。古墳の調査が終了すると、市田よ

りも一段高い段丘面にある清東原遺跡を調査し、皮剥ぎ、厚手派土器、石鏃、磨製石斧、弥生式土器など数種類の石器や土器類を採集した。

さらに河岸段丘を一段のぼり高位段丘面に出て、山吹学校に到着した。ここには周辺で出土した数々の石器や土器をはじめとする遺物が陳列されていた。鳥居龍藏がとくに注目したのは、新田原から出土した弥生式土器であった。

これらの陳列品の見学が終了すると、学校長の案内で、山吹学校のある大島村内の遺跡に出かけ、簡単な発掘も行なった。そのときの成果としては、同村の南端に位置するビクニ塚で、石剣の破片を採集したことである。というのは、石剣はこれまで信州において出土例がなかったからである。その後、同村内では二つの学校である大島学校に向った。大島学校でも山吹学校同様、講堂に近年発掘された石器や土器などの遺物が所狭しと陳列されていた。大島村では、このように二校に陳列されていた遺物を見学したが、遺物を採集した状態などから、同村あげての遺物を守り、保存しようという態度が随所で明白にみられ、大変うれしく感じた。

翌五日は座光寺村の学校を訪問した。ここでも前日同様、

周辺で採集された遺物が整頓されて陳列してあった。当村はとくに古墳が多く存在することであるが、とりわけ高丘の森から出土した埴輪と古鎧の二点に関心をもった。というのは、前者の埴輪をみて、一般には埴輪や土偶などを作成するようになって以降、殉死の風習がなくなつたとされてきたが、殉死するという風習は古代の道徳思想としては第一義を占めるものである。それ故、かような国民性は、一片の命令によってなくなってしまうとは考えられない。つまり、埴輪や土偶作成以降も殉死の風習が残っていたに違いなく、その証拠が主墓の近くにある陪塚であると看做した。また後者の古鎧をみれば、当時の人びとの身体や風習を想像することができるので、この地方の人びとの生活の一端が判明するのである。

その後、学校で多くの採集品が陳列してあった高丘の森に出かけた。高丘の森と当地では称しているが、森ではなく完全な前方後円墳であった。この古墳をこのように森と呼んでいるのは、古墳の規模が大きく、森のようにみえるからであった。この古墳の特徴は、内部の石壁を朱色に着色している点である。かように、石壁に着色したり、紋様あるいは絵画などの装飾をほどこした事例は、他地域の古

墳ではよくみかけられる。しかし、上伊那地方の古墳では珍しいものであった。また周辺には、古墳の陪塚が連なっている。このことから鳥居龍藏は、この古墳に埋葬されている人物は、当地方を治めた豪族の長ではないか、と看做した。その後、周辺の古墳数基を見学した。そして本日の最終目的地である上飯田学校に向った。上飯田学校でも鳥居龍藏のために、同校周辺で採集された遺物を見学するためであった。鳥居は陳列された遺物を見学し終って次のようなことに気づいた。上飯田といえ、石器や土器を中心とする遺物の出土が少ないことで有名であった。しかるに、このような多量の遺物が採集され、陳列されていることは大変な驚きであった。同校の先生方の採集の苦心が偲べると共に、同地方の文化レベルの高さを感じた。

六日は天竜川の左岸、いわゆる竜東地方に出かけた。調査には当日東京からやって来た鳥居龍藏の勤務する人類学教室の学生および郷土史家が参加した。一行が最初に訪問したのは河野学校であった。この学校での陳列品では、厚手派土器の円筒埴輪が注目された。円筒埴輪自体の出土が、前述したように当地方では少ないのであるが、出土したものは口径約一尺余寸（三〇数センチメートル）、高さは一

尺五寸一分（約四五センチメートル）という大きなもので、側面には模様がみられた。次に近くに位置する神稲学校に向った。神稲学校でも付近で採集した遺物が多数陳列してあった。ここでも生徒が採集した土偶がとくに注目された。

さらに隣接する喬木村の喬木学校を訪問した。喬木学校では鍍金した馬具などが陳列されていた。このように各学校で非常に多くの遺物を見学でき、大変うれしく思ったが、本来であれば、学校での陳列品のための見学だけではなく、直接遺跡に出かけ調査を実施する予定であった。しかし、生僧の降雨のため学校での見学が中心であった。本日見学した竜東地方は、従来あまり注目されていなかった地方だけに、雨天が残念であった。

翌七日も雨天であった。しかし飯田市の南に位置する伊賀良村三日市土器洞に祝部土器³⁵をはじめとする多くの土器類が埋まっているという話を聞いた。そこで雨天にもかかわらずここを発掘することにした。その結果、この地が古代の製陶場であることが判明した。またここ数日間の各学校での採集された遺物の陳列品の見学などを通して、下伊那地方は従来から弥生式土器の出土が極めて少ない地域とされてきた。しかしながら、各学校の陳列品の中には、かな

り多くの弥生式土器がみられた。このことから、従来の見解とは異なり、早期からここ下伊那地方においても「固有日本人」が居住していることが判明した。発掘調査が終了すると、近くの三穂村に出かけた。当村は全村が古墳だといってもよいほど古墳が多く存在する。これらの古墳は判明しただけでも八ヶ所³⁶にのぼる。その中でも別所原で発見された子持ち曲玉は大変めずらしい遺物で、祭器として用いられたものと推定できる。

八日は昨夕下調査をしておいた飯田に南接する時又にある開善寺周辺の遺跡調査を行なった。開善寺には鎧、馬具、鎌、直刀、鏡などの金属品から同時代の土器類まで多くの遺物が所蔵されている。最初にこれらの所蔵品を見学した。その後近くの竹林や桑園の中を遺物を求めて歩き回り、布目瓦の破片など貴重な遺物を数点採集した。しかし、同寺周辺の遺物の多くは、骨董品として既に匹散しているのは残念なことであった。次に近くの根尾村の根尾学校に向った。ここでも周辺の古墳から出土した遺物が多く陳列されていた。

以上下伊那地方の調査は合計八日間という短期間であった。しかし、地元の学校の先生方や郷土史家の人びとが熱

心に準備してくれていたもので、多くの成果を得て終了した。かかる調査の概要に関しては、既に述べたように、その後実施された八月・九日から二七日の調査分をも合わせて、八月二七日に飯田市の下伊那郡教育会で講話した。

(三) 信濃調査の成果

前項では信濃調査に至るまでの契機や調査内容などに関して、鳥居龍藏の調査記録を参照して、その特色について検討した。ではこのようにして実証された諏訪および伊那地方を中心とした調査は、どのような学問的成果をあげたのであろうか。前項でも部分的には多少触れることもあったが、以下において分析・検討していくことにする。

幸運にも後者の伊那地方に関しては、調査最終日の夜に、これまでの成果の一部を講話として発表していることは紹介したとおりである。³⁶ また、前者の諏訪地方の調査を含む信濃全域（有史以前に限定されるのであるが）に関しては、調査終了後の大正・三年（一九二四）の論文で要領よく整理を行なっている。³⁷ 本稿では、これらの著作および論文を参照して論を進めていくことにする。

鳥居龍藏が信濃を調査して最初に気付いたのは――以前畿

内調査⁽³⁸⁾を実施したときにも気付いていたと推定できるが、次のようなことであつた。すなわち、従来の日本における先史考古学（あるいは考古人類学）の研究は、平地における研究のみであつた。それ故かかる学問つまり先史考古学（あるいは先史人類学）に対する方法論は、平地での研究から帰納されたものといわざるを得ないという側面を有していた。この点を克服しようと、依頼されたとはいえ、鳥居龍藏は信濃調査に非常な意欲を燃やしたのであつた。

というのは、山岳地帯は地形学的にみても、その状態は平地と大いに異なつて⁽³⁹⁾いる。したがって、とりわけ古代の研究においては、山岳地帯を平地と同列に看做すことはできない、と強く主張する。ここで古代という時代がとくに強調するのは、山岳地帯という地形的な条件に加えて、「古代は鬱蒼たる森林であり、道路はなく、平地・山岳の間は確然かつ重大なる分離的性格は存在して居たのでありましよう、こは延いて文化の程度・発達等の差異心理状態の差異を生じたので⁽⁴⁰⁾しょう。」と論じ、古代においては地形的条件以外にも異なる環境が存在することを、鋭く指摘している。

かように、鳥居龍藏は、平地とは異なる自然および人文

の両環境が山岳地帯に存在するとみた。そのことを具体的に示そうとして次のような作業を行なつた。すなわち、古代の研究の基本的作業と称すべき遺跡の分布状態を表現する地図を作成する場合においても、たんに平面的に遺跡の分布状態を図示するのではなく、垂直分布図を作成する必要があると痛感する⁽⁴¹⁾。このような遺跡の垂直分布図を作成すれば、当時の人びとがいかに高度な場所に分布・居住していたか、明白に判明すると考えたからである。

信濃地方は以上指摘したような特色をもつ山岳地帯の代表的な地域といえる。現地でのフィールドサーヴェイなどから得られた山岳地帯としての信濃の有史以前の特色をまとめると次のようになる。

① 前述してきたことと若干重複するが、信濃地方における有史以前のアイヌおよび「固有日本人」の生活は、当地に平家落人伝説が残っていることなどから、一般には平地よりも遅れて人びとが居住したように考えられる傾向があつた。しかし、石器時代平地に人びとが居住を開始したとほぼ同時期に、信濃においても人びとが居住していることが遺跡や遺物の調査で判明した⁽⁴²⁾。しかも、文化面に關しては、信濃の方が優れているといえる。このことは、

有史以前の日本列島の住民であるアイヌの残した遺物の分析を行なえば、かかる事実はいより明確なものとなると思われる。

周知のように鳥居龍藏は、当時のアイヌは使用する土器の形式により、厚手派土器を使用する集団と薄手派土器を用いる人びとの二系統に分かれていたと看做していた。信濃では、そのうち前者の厚手派土器を出土する遺跡が圧倒的に多かった。かかる事実はい、この形式の土器を用いる人びとが信濃の住民の中心であったといえる。厚手派土器は、薄手派土器と比較すれば、荒けずりで、形が大きく、紋様も頗る雄大な渦巻き状を呈しているという特色があり、主として狩猟民が使用したものと推定される。さらに土偶の作成も盛んな地域である。以上のように土器にみられる美しい装飾や土偶の作成技術などにより、当地の文化水準が高かったと推定したのである。

② 信濃の中心に位置する諏訪湖の湖底に存在する住居跡に関して、恩師である東京帝国大学教授坪井正五郎などは湖上住居説、同じ東京帝国大学教授神保小虎などは地滑り説を各々唱え対立がみられた。かかる点について鳥居龍藏は、湖底の住居跡は、湖上で筏を組み、その上で生活し

ていた人びとの生活用品などが上から落ちて沈んで堆積したものであると推定した。すなわち筏説を提唱した。

③ 信濃では黒曜石を原料とした石鏃などの石器が大量に出土する。黒曜石は和田峠付近が原産地である。にもかかわらず、黒曜石およびそれを原料とする石鏃などの石器は遠く関東地方にまで分布している。つまり、かような黒曜石および石鏃などの分布は、当時の交通や貿易、物々交換などの経済的側面に関して、信濃が重要な場所を占めていたことがうかがわれる。この点からも、信濃は当時文化水準が高かったものといえる。

以上の三点が信濃におけるフィールドサーヴェイの数ある成果の中で特筆すべきものであると思われる。なお伊那地方に関しては、以上の特色を同様に備えているが、とくに古墳が多いことが目立つ。この点は、諏訪地方には神様を祭る大社が鎮座しているにもかかわらず、古墳が著しく少ないのとは好対照となっている。しかし、かかる理由については不明である。伊那地方の古墳は瓢型をした前方後円墳と円形の円墳の二種類が存在する。その中でも、座光寺村高岡の前方後円墳には石室が存在し、その側壁が朱色に塗られているという特徴がみられる。また当地方の古墳

には石棺が存在しない。理由は山地なので、木棺が用いられたからであると推察できる。このように、当地方に古墳が多いのは、美・信両国の国境にある御（神）坂峠を入口として、近畿地方の文化が古代に入ってきたからである、と推定できる。ちなみに、石室内部を塗飾したり絵画で飾るのは、近畿あるいは九州に多くみられる形式である。

註

(1) 周知のように、鳥居龍藏が著作や論攷において使用している日本の時代区分に関する名称に関しては、現在一般的に用いられている区分とは異なっている。本文でも、以降度々これらの用語に関して言及するので、両者の相違について簡単に説明しておくことにする。

鳥居龍藏がいう有史以前とは石器時代に限定される。具体的にいえば、縄文時代および弥生時代をさす。また次の原史時代とは古墳時代のことである。なお、鳥居龍藏が下記の著作などにおいて主張する現在の日本人（すなわち日本民族）の直接の祖先と考えている「固有日本人」は、有史以前の後半つまり弥生式土器を使用していた、国津神系の集団を想定している。さらに、日本列島の「固有日本人」以前には、アイヌが先住民族として広範囲に分布・居住していた。この集団は、居住する地

域が大きく三地域に分かれており、それぞれの地域では厚手派、薄手派および出奥（出羽・奥州の略―筆者註）派という名称で呼ばれる特色ある土器を用いていたという。

鳥居龍藏（一九二五）『有史以前の日本、改訂版』磯部甲陽堂、鳥居龍藏（一九七五・A）『鳥居龍藏全集 第一巻』朝日新聞社、一六七―四五三ページ所収。

この点に関して、有史以前におけるアイヌ、「固有日本人」などの分布地域を示す分布図を作成したことがあるので参照されたい。

田畑久夫（一九九二）「鳥居龍藏と大和―畿内調査を中心に―」日本文化史研究一六、四〇―五八ページ、とくに五二ページの第二図。

(2) 厳密に言えば、それより以前明治四二年（一九〇九）七月に信濃の一部である野尻湖周辺の短期間のフィールドサーヴェイを実施した。かかるフィールドサーヴェイは信濃教育委員会上水内部会により調査を依頼されたもので、その後同湖周辺は大正九年（一九二〇）および大正十五年（一九二六）にも実施された。その成果は、「先史人類学よりみたる野尻湖」という論文として結実し、次の書物の一部に収録された。

田中阿歌磨編（一九二八）『野尻湖の研究』岩波書店

その他、実際にはフィールドサーヴェイを行っていないが、大正三年（一九一三）に「有史以前の諏訪湖畔の住民」という

題名の論文を、右記の書物の一部として執筆している。

- (3) しかしながら、第一表にみられるように、大正十三年（一九二四）には博士論文審査に関連して、東京帝国大学理科大学助教授を辞職することになった。かかる意味では大正時代は学問的人生の大転換期になったといえる。といつても、鳥居龍藏は、その後完全に教職を去ったのではなく、前年の五月より就任していた國學院大学教授は継続していた。さらに昭和三年（一九二八）には、上智大学の創設メンバーとして学校運営に参加し、文学部長に就任している。
- (4) 現在ではサハリンと称されている島である。本稿においては次の拙論などと同様に、鳥居龍藏が活躍した時代に論点をおいて分析・検討を行なっている。それ故、本稿中の地名などに関しては、原則として鳥居龍藏が使用している当時の呼称で表記し、初出の場合に限って現在の名称を括弧内に併記した。
- 田畑久夫（一九八八・B）「鳥居龍藏の朝鮮半島調査——調査記録などの分析を通して——」昭和女子大学文化史研究、三三、六二ページ。
- (5) かかる調査に関する分析・検討は次の拙論で行なった。
- 田畑久夫（一九九八・A）「鳥居龍藏と北千島——調査記録よりの分析——」昭和女子大学文化史研究創刊号、六二、一〇五ページなど。
- (6) かかる調査に関する分析・検討は次の拙論で行なった。
- 田畑久夫（二〇〇〇）「鳥居龍藏と日向——フィールドサーヴェイの分析を通して——」昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要九、四三、六五ページ。
- (7) かかる調査に関する分析・検討は次の拙論で行なった。
- 田畑久夫（一九九八・A）「鳥居龍藏の沖縄調査——調査記録などの分析を通して——」昭和女子大学大学院生活機構研究科紀要八、九七、一五ページ。
- (8) 鳥居龍藏の沖縄への関心は、東京帝国大学総長渡邊洪基が、日本の人類学調査としてもっとも必要な場所は、第一に沖縄、それから台湾、朝鮮（朝鮮半島）である、と鳥居に助言したことに由来するが、鳥居龍藏が東京帝国大学理科大学人類学教室の標本整理係に任命されて以来、とくに懇意になっていた南方諸島の植物分類学の権威であった田代安定から、種々沖縄に関する教示を得ていた。このこともあって鳥居自身が沖縄調査を強く希望していた。かかる経緯に関しては次の拙論に詳しい。
- 前掲（7）九八ページ。
- (9) フィールドサーヴェイは、エクステンシヴ調査あるいはインテンシヴ調査のいずれか一方のみの方法では不十分で、両調査方法は互いに補充関係にあるといえるが、どちらの調査方法を重視するかによって分類したものである。かようなフィールドサーヴェイの方法に関する区分や鳥居龍藏にみられるフィールドサーヴェイの特色に関しては、次の拙論中でも論じたこと

があるので、参照されたい。

田畑久夫（一九九四）「鳥居龍藏の Field Survey—西南中国
口族調査を中心に—」兵庫地理 39、一九〇三—八ページ。

田畑久夫（一九九九・B）「鳥居龍藏のフィールドサーヴェ
イ—西南中国調査を事例として—」岐阜地理 43（「伊藤安男会
長古稀記念論文集」）一六二—一六五ページ。

(10) 次の著作として完成した。

鳥居龍藏（一九二四）『諏訪史 第一巻』信濃教育会諏訪部
会発行、古今書院発売。

鳥居龍藏（一九七六・A）『鳥居龍藏全集 第三巻』朝日新聞
社、一〇四—一八ページ所収。

なお、鳥居龍藏が執筆することになったのは、大正七年（一九
一八）に当時諏訪史編纂東京主任であった今井登志喜の直接の
依頼によるものであった（鳥居龍藏（一九七六・A）三ページ）。

(11) 次の著作として完成した。

鳥居龍藏（一九二六・A）『先史及原史時代の上伊那』信濃
教育会上伊那部会発行、古今書院発売。

鳥居龍藏（一九七六・E）『鳥居龍藏全集 第四巻』朝日新聞
社、一〇二—四八ページ。

なお、『諏訪史 第一巻』同様に、上伊那地方の先史および原
史時代の郡史を執筆することになったのは、鳥居龍藏によれば、
大正九年（一九二〇）五月に上伊那郡教育会会長原才三郎から

の依頼であるとしている（鳥居龍藏（一九七六・E）三ページ）。
しかし、同書同頁に一部が引用されている上伊那郡教育会総集
会の記録によれば、依頼されたのは大正八年と記されており、
一年のずれがみられる。

(12) 分担執筆者の名前は著作の表紙あるいは目次などに銘記され
ていない。しかし、『諏訪史 第一巻』に関しては、先史時代の
部は八幡一郎、原史時代の部は小松眞一と共同で、また『先史
及原史時代の上伊那』については、地形の部を八木真助、先史
時代および原始時代の部はそれぞれ前著『諏訪史 第一巻』同
様、八幡一郎、小松眞一の両名の手を煩わした、と各々の著作
の目次でことわりがきをしている。

前掲（10）鳥居龍藏（一九二四）、同（一九七六・A）三ペー
ジ。

前掲（11）鳥居龍藏（一九二六・A）、同（一九七六・E）
四ページ。

なお、鳥居龍藏の著作の中で共著の形式を採用している書物
は、次の二書ぐらいである。しかも共著といっても妻子である。

鳥居龍藏・鳥居君子・鳥居幸子・鳥居緑子『西比利亜から満
蒙へ』大阪屋号書房、鳥居龍藏（一九七六・C）『鳥居龍藏全
集 第一〇巻』朝日新聞社、一六七—二八ページ所収（鳥居
龍藏担当部分のみ）。

鳥居龍藏・きみ子（一九三三）『満蒙を再び探る』六文館、鳥

(20) 調査記録を中心にまとめた『有史以前の跡を尋ねて』の構成

では、同年七月末日から八月にかけて実施した福島・新潟の両県の調査記録が、第一章および第二章となっている。つまり、時期的に早く行なった信濃調査は第三章以下というように、同著では前後関係が逆になっている。かかる点は、著作の構成として調査時期よりも北から南へという調査地域の配列を重視したことと、翌一〇年には天竜川上流に位置する上伊那地方の調査を行なっているが、その記録との関連性をもたせるための二点が考えられる。

(21) 前掲(16) 鳥居龍藏(一九二五)、鳥居龍藏(一九七六・A) 四六三ページ。

(22) 以下の記述は主として次の書物によった。

前掲(16) 鳥居龍藏(一九二五)、鳥居龍藏(一九七六・A) 四六三～四七七ページ。なお調査は四月二二日から五月一〇日にかけて実施された。

(23) かかる点つまり興味あるいは疑問を感じたら、書物など活字の力を借りないでできうるかぎり現地に赴いて解決しようとした。かような鳥居龍藏の問題解決の方法を、筆者は西南中国調査を事例として、鳥居龍藏の実証主義的な研究態度と呼んだことがある。

田畑久夫(一九九七)『民族学者 鳥居龍藏—アジア調査の軌跡—』古今書院、四三～八二ページ。

なお、この調査には諏訪郡史編纂主任、地元の学校の校長・教員および八幡一郎などが同行した。

(24) 東部シベリアに関しては、大正八年(一九一九)、大正一〇年(一九二一)および昭和三年(一九二八)の合計三回フィールドサーヴェイを実施している。その成果は次の書物として結実している。

鳥居龍藏(一九二四)『人類学及人種学上より見たる亜細亜』岡書院、鳥居龍藏(一九七六・B)『鳥居龍藏全集 第八卷』朝日新聞社、一～二五九ページなど。

なお鳥居龍藏の東部シベリア調査に関しては以下の拙著でも論じた。

前掲(23) 一五三～一九四ページ。

(25) 前掲(16) 鳥居龍藏(一九二五)、鳥居龍藏(一九七六・A) 四七〇ページ。

(26) ここは広大な裾野平野で、背後に蓼科山(二、五三〇メートル)、八ヶ岳などの高峻な連山がまるで屏風のように連なっている。関東地方からみれば、これら連山の山裏に該当するので、山浦と称されることになった。

(27) 同行は、これまで度々参加を願った諏訪郡史編纂主任、地元の郷土史家、八幡一郎および早稲田大学学生宮坂光次であった。

(28) かかる二つの小丘については、巨人伝説のデイダラボッチの話が現在でも残っている。鳥居龍藏は、かかる伝説をアイヌに

伝わる伝説とを考えていた。そこでアイヌが当地域に居住していたのではないかと推論した。

- (29) 遺跡は、円山という小丘がある中島と呼ばれている場所にあった。なお円山に関しては、巨人のダイダラボッチが運んできた土砂が落ちて形成されたという伝説がある。

- (30) 大正一〇年(一九二一)八月、九日から二七日に至る七日間の調査に関しては、簡単ではあるが記録を中心としたものが存在する。

前掲(16) 鳥居龍藏(一九二五)、鳥居龍藏(一九七六・A) 四八二～四八六ページ。

なお同調査が終了した最終日、飯田市下伊那郡教育会で「伊那谷の有史以前と歴史時代の概論」という講話を行なった。その講話では上伊那調査で得た成果の一部を話した。

前掲(16) 鳥居龍藏(一九二五)、鳥居龍藏(一九七六・A) 四九六～五〇七ページ。

さらに翌三、八日から本曾谷に通じる御(神)坂峠(一、五九五メートル)は美・信両国の国境にある峠で古来より関西地方から信州はもとより、上野・下野両国をはじめとする関東地方に入る公道として、文化史上重要な位置を占めていた。しかしながら現在ではまったく廃道のような状態となっている。それ故、この峠を踏査してみたくなったのである。

前掲(16) 鳥居龍藏(一九二五)、鳥居龍藏(一九七六・A)

五〇八～五〇六ページ。

- (31) 鳥居龍藏は、石器や土器などの遺物が出土する当時の遺跡を自然の状態から分類すると次のようになると主張する。つまり、一般に遺跡と称されているものは、遺物包含層と遺物整列地として二分できるという。座光寺原遺跡は後者の事例だとする。

遺物包含層とは、遺物がほぼ水平線をなして地中に埋没されたものからなる遺跡、日本の多くの遺跡はかかる形式のものである。このように遺物が水平に包含されるのは、この地層が有史以前地上にあった当時の器物が長い年月の間に次第に土を被って形成されたためであると看做した。それ故、遺物包含層は、洪水あるいは人為的な削除というような変則的なことが起こらないと仮定すれば、石器時代の相対年度や他の地方との時間的な差違を知ることができるのである。

一方これに対して、遺物整列地は、上述の遺物包含層が風力や水力さらには樹木の根が伸びだすなど自然的な力によって、あるいは耕作、土木工事など人為的な力によってあばき出された遺物が地上に散乱した状態の遺跡をいう。我々が最初に遺物を発見するのはかような状態の遺跡である。

前掲(10) 鳥居龍藏(一九二四)、鳥居龍藏(一九七六・A) 四一～五ページ。

ただし鳥居龍藏は信濃調査において、このように明確に区分して遺跡名を呼ぶことは大変少なかった。

(32) 前掲(16) 鳥居龍藏(一九二五)、鳥居龍藏(一九七六・A) 四八七ページ。

(33) 信濃地方の遺跡調査に限らず、鳥居龍藏の国内調査では、郷土史などの作成あるいは地方での講話を依頼されることが多かった。鳥居龍藏としては、郷土史の作成には地元学校の先生方の協力を得ることも多く、遺物の採集方法などを教示する必要があったので、依頼されれば、喜んで講話を行なった。そのようなこともあって、現場に入ると最初に学校に立ち寄ることが多かった。そこで学校の方でも鳥居龍藏の調査の便を考えて、採集した石器や土器などの遺物を特別に陳列・展示することにした。とくに下伊那調査においては、このような傾向が顕著であった。鳥居龍藏は、調査の先々の学校で、かかる陳列品や展示物を見学することができたのであった。

(34) 諏訪地方調査同様、上伊那調査も鳥居龍藏が単独で調査するのではなく、地元の郷土史家の研究会である諏訪史談会に所属するメンバーが数名同行した。なお、当日東京からやって来たのは東京帝国大学の学生八幡一郎と早稲田大学に籍を置いていた宮坂光次であった。

(35) 須恵器のこと。古墳時代後期より奈良・平安時代にかけて、大陸から渡来した集団やその技術を習得した集団によって作成された素焼きの上器。

(36) そのときの講話の記録は、次の書物の中に収録されている。

前掲(16) 鳥居龍藏(一九二五)、鳥居龍藏(一九七六・A) 四九六～五〇七ページ。

(37) 鳥居龍藏(一九二四)「有史以前の山岳民族と其の生活に就いて」人類学雑誌39―1、前掲(16) 鳥居龍藏(一九二五)、鳥居龍藏(一九七六・A) 五二八～五二七ページに収録。

ただし既に紹介したように、諏訪および上伊那の両地方に関しては、それぞれ『諏訪史第一巻』および『先史及原史時代の上伊那』という大著を刊行している。したがって、両著の詳細な分析・検討を通じてはじめて鳥居龍藏の信濃調査に関する成果を正当に評価することが可能であると思われる。かかる点に関しては、これら両著の成果は、大正一四年(一九二五)発行の『有史以前の日本』(磯部甲陽堂)の中で、論を展開するときの基礎的な資料として十分に活用されている。このような経緯が存在するので、両大著の分析・検討は、本稿の目的が鳥居龍藏の「固有日本人」説の検討であることなどを踏まえ、『有史以前の日本』を論じうる予定の別稿に譲りたいと思う。

(38) 同調査は、明治三三年(一八九〇)、明治三七年(一九〇四)および大正六年(一九一七)の三回にわたって実施した。なお同調査の分析・検討は以下の拙論を参照のこと。

前掲(1) 田畑久夫(一九九二)

(39) この点に関して、現在の研究者が平地と山岳地帯の差を格別感じないのは、交通機関が発達したためであるという。

(40) 前掲(16) 鳥居龍藏(一九二五)、鳥居龍藏(一九七六・A)

五・九ページ。

(41) かような見解を強くもつようになったのは、台湾調査での経験からであった。すなわち、台湾の先住民は海拔高度つまり垂直分布によって住み分けを行なっていることに気付いていたからである。なお、かかる点に関しては推測であるが鳥居龍藏の自叙伝を参照すると、鳥居はドイツの著名な地理学者Humboldt.A.の名著“Cosmos”を読破しているので、垂直分布による動・植物あるいは民族集団の住み分けは、あるいはHumboldt.A.の影響かもしれない。

前掲(19) 鳥居龍藏(一九五三)、鳥居龍藏(一九七六・A) 二〇・ページ。

(42) とはいえ、信濃地方の有史以前の人びとが、最初は平地に住していた集団である、ということも鳥居龍藏は認めている。この平地に居住していた集団の一部が鹿など野生動物を追いつつ、溪谷を遡上してやって来たと推定している。

(43) 坪井正五郎は、鳥居龍藏を学問の道に導いてくれた大恩人で、その下で勉学にはげんだ。一方神保小虎も、アイヌ語を教えてくれた恩師で、一時中国の遼東半島に助手として調査に行くことになっていた。

(44) 信濃地方のフィールドサーヴェイを行なう以前に書いた論文では、かかる湖底遺跡は神保小虎などと同様に、地滑り説を採

用していた。

前掲(2) 田中阿歌磨(一九二八)、鳥居龍藏(一九七六・A) 五九四～六〇〇ページ、とくに五九七ページ。

なお現在では、鳥居龍藏説も誤謬とされている。藤森栄一らの努力によりかかる湖底遺跡は、諏訪湖の水位上昇のために水没してできたものであることが判明している。